

撃墜されたB29と

一人の宇佐航空隊員

国見町 広末 九州男

国民学校四年生の時だった。当時十歳であったが忘れられない戦時の記憶が一つある。

昭和二十年の初夏、太平洋戦争はすでに日本の敗色が決定的になりつつあった。日本の都市のほとんどは米軍の空襲によつて壊滅的な被害を受け、田舎の集落のワラ屋根にさえ機銃弾が飛んできたりしていた。日本上空の制空権はすでに米軍の航空機に握られ、わがもの顔で低空を飛ぶグラマン戦闘機や、空を覆い尽くして轟音を響かすB29爆撃機の大編隊を、防空壕の入り口から恐る恐る見上げる日々であった。

そんなある日、竹田津湾の沖合で空中戦があり、飛行機が一機撃墜されて海中に落ちたという噂がひそかに流れた。このような事件はすぐに軍事機密として箝口令が

敷かれ、公にして発表されることなどは決してなかったからである。真相の分からない町民は、戦争の不利な状況から見て日本の飛行機が落ちたに違いないと、ひそひそと囁き合った。

もう国民は、いかに大本営が隠し続けても、日本に勝利がないことをすでに知っていた。

とその次の日、錨の徽章をつけた白地の戦闘帽をかぶる若い兵士たちが二、三台のトラックに乗って町にやって来た。食事と宿泊を兼ねて、「竹屋」がその兵士たちの指定食堂となった。

彼らは浦手地区の漁師の船を借り上げて、湾の沖合に出てはなにか調査作業を幾度も続けていたが、関係者以外は何も町民に知らされなかった。

その作業のない時もあるらしく、時間の空いた若い兵士たちは一人だけで、また二、三人で一緒になり、家並みに沿った道路を散歩していた。当時、町の若者は全て兵役か徴用に残らず取られ、若者の姿を見ることはめずらしいことであった。この兵士たちの姿を見た町の人たちは、お国の為に戦う彼らを気持ちよく家に招き入れて接待した。まだ童顔の残る若者たちは宇佐航空隊から来

ただだけ告げたが、ここに来た理由については全く明かさなかった。

わが家でも第一回目は二人の兵士を呼び入れて歓待した。歓待といつても、当時は塩からタバコまであらゆるものが、全て配給制になっており、菓子や酒類は贅沢品として商店の棚から姿を消し、彼らに食べさせるものは何もなかった。

町に食べ物を作る店としては豆腐屋が近所に一軒だけあった。そこで、ここから「豆腐」を数丁買って来て、それを田楽でんがくにして味噌をつけて焼き、密かに作った酸っぱい甘酒を飲ませることぐらいが、彼らへの精一杯のもてなしであった。わが家の居間は久しぶりに若者の声で遅くまで賑わった。

次の日の午後は、一人で歩いている兵士を招き入れた。この日も出したのは、やはり豆腐であった。家庭の団欒だんらんを思い出して、気持ちが軽くなったのか、彼は家族や航空隊での生活のことを熱っぽく話し続けた。学徒動員で航空隊員になった飛行学生であった。

帰りぎわ、今日のお礼だと言つて彼は母に五円紙幣を差し出した。戦時中の五円の価値は現在の五千円ぐらい

であろうか。あまりの高額さに驚いて、母が押し戻すと、今度はわたしの手にそれを握らせ、母に向かつて「このお金は持つていても、自分にはもう用がないのです。あと数日すれば出撃命令が来ることになっています。だから、これで坊や何か学用品でも買って、大いに勉強するんだよ」と小さく言い残すと、笑顔でいつまでも手を振りながら歩き去つていった。

出撃するということが何を意味するのか、幼いわたしにも薄々気がつく年令になっていた。新聞の紙面には、「神風特別攻撃隊出撃」とか「敵艦船に体当たり」などの言葉が、勇ましくそして空しく躍つていたからである。

沖合での調査作業は四、五日続いたが、どんな成果があつたのか誰にも知らされず、分ならず、いつの間にか兵士たちは消えていた。

当時の宇佐海軍航空隊「戦時日記」によると、次のような内容のことが書かれている。

五月七日、国東半島の上空を通過して北九州方面に向かうB29四十機に対し、果敢に攻撃を挑んだ陸軍航空隊の複座戦闘機屠竜とりりゅうの数機があつた。この戦闘機は、B29の編隊が豊後水道方面より北上襲来中との報告を受け、

福岡県の小月航空基地から飛び立った第十二飛行師団第四戦隊で、国東半島上空で敵機の編隊と遭遇したのであった。

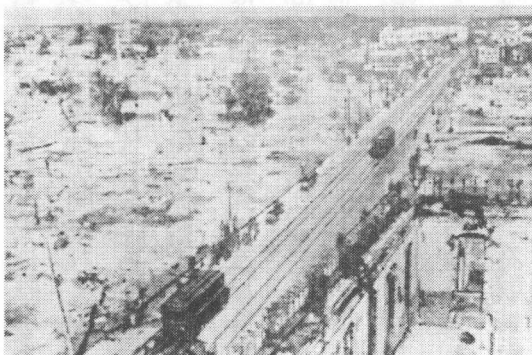
二機の屠竜とりようが、そのB29編隊の一機に狙いを定め上下から襲いかかった。激しく応戦してくる敵機からの機銃掃射をくぐり抜け、西尾半之進准尉の発射した銃弾がB29の双発エンジンに命中した。敵機は飛行パランスを失い、そのまま海中に突っ込んで沈んだ。撃墜である。だが准尉の搭乗機の左エンジンも被弾して飛行できなくなり、宇佐飛行場に不時着した。准尉の報告を受けた航空司令部は、すぐに調査団を派遣して探索した。これが竹田津町にきた兵士たちであった。しかし海底までの水位が深く、当時の潜水技術ではうまくいかなかったようである。戦時日記には、その調査記録は残されていない。

同じ日、第四戦隊の回天特攻隊員であった村田勉曹長も屠竜に搭乗し、中津市付近まで接近して来たB29の一機に体当たりして戦死した。このB29は八面山の頂上に墜落し、米軍の飛行士二名がパラシュートで脱出したが、他の搭乗員は戦死した。この二人は山麓で捕虜になり宇佐航空隊に連行されたという。

追い詰められた戦局の中で大本営は、四月六日から五月十一日にかけて、ついに菊水作戦を発動させた。この作戦は沖縄島の沖合に浮かぶ米軍の艦船に対して、第一八幡護皇特別攻撃隊による、命を賭けた八次にわたる出撃命令であった。

この菊水作戦の特攻機のどれかに、あの時わが家に立ち寄った若い隊員がきつと搭乗し、沖縄の海上で散華さんけしたに違いないと、今もわたしは固く信じているのである。

▼焦土と化した大分市街



7月16日夜と8月10日昼の大空襲で焼け野原となった大分市。手前右が大分合同銀行（いまの府内会館）、ほとんど新川の海が見通された。（大分合同新聞社提供）